

# ワイルドとジイド

堀江珠喜

(園田学園女子大学助教授)

ワイルドの「周囲の人たち」として、コンスタンスやボジーとともに取り上げるには、ジイドはふさわしくないかもしれない。というのも彼らが会った回数は、仮に「友」と呼ぶには少なすぎるのである。それでいてジイドが、後半生の大小それぞれの転換期にあるワイルドと顔を合わせているのは興味深い。

まず1891年11月下旬から12月中旬のあいだ、ジイドはバリ滞在中のワイルドと知り合い、毎日のように会う。ピエール・ルイスが同席したこともある。ジイドにしてみれば、マラルメのサロンでワイルドの噂を耳にして以来、ひそかに憧れていただけに、興奮の日々であったろう。ヴァレリーにも早速、ワイルドについて手紙で報告している。

この頃のワイルドは『ドリアン・グレイの肖像』が認められ、『ウィンダム嬢夫人の扇』初演を目前にして、いわば栄光への坂道を駆け上ろうとしていた。『サロメ』も執筆中である。しかし自信と才能、活力にあふれたワイルドは、いささかジイドにはまぶしすぎたようだ。自分を見失うことを恐れた彼は、神に救いを求め、精神的にワイルドと訣別しようとする。年末のことである。

おそらくジイドは、10月中旬から12月下旬までの日記を破り捨てたものと思われる。そこには狂信的なほどワイルドの名が記されていたに違いない。こう思うと残念ではあるが、この反動は、ジイドの心に占められていたワイルドの存在の大きさをかえって証明するものである。

翌年1月1日付の“Wilde ne m'a fait, je crois, que du mal”という一節以外、1904年まで、ついにジイドの日記にはワイルドの名は見当たらない。しかし1894年5月末、フィレンツェでジイドは、ワイルドとボジーに邂逅している。このときのワイルドは作家としての絶頂期にいたわけだが、経済的な余裕は奔放な生活を招いた。それを鋭く感じ取ったのか、ジイドは母にあてて、ワイルドが少し老けて醜くなったと書き送っている。

次に彼らが出会ったのは1895年1月末のアルジェである。ボジーも一語だった。このときのことは『一粒の麦も死なずば』で語られている。奇しくもカタストロフの直前に、同性愛のメッカでこの二人に会ったのは象徴的な出来事といえよう。

ジイド自身、1893年の北アフリカ旅行で既に同性愛の経験があったため、彼らを見る目

も以前とは異なっただけである。つまりかつて自分が惹かれた姿ではないワイルドを嫌悪しながらも、同類への共感を隠しきれない。ボジーに対しては、その個性の強さを認め、嫌いなながらもどこかで惹かれているのである。

この同類への共感は、ワイルドが出獄し渡仏したとき、ジイドをベルヌバル・シュル・メールへ向かわせた。1897年6月20日のことである。ワイルドはジイドに新しい戯曲の構想を話し、書き終えるまでは田舎に引きこもるつもりであることを告げる。初めて知り合った頃を思わせる、そんなワイルドであった。

ところがこの言葉とはうらはらに、まもなくワイルドはバリへ移る。執筆の様子もない。ジイドにしてみれば裏切られたような気持ちがしたに違いない。そのエッセイ『オスカー・ワイルド』では、バリで偶然に二度会ったことを記している。あまり会いたくもない相手だったろう。なにしろワイルドときたら1898年12月にはジイドあてに、その作品を称賛しながら200フランの借金を申し込んだりすることになるのだ。ジイドはこれについて触れてはいないが、応じたようである。

このようにワイルドへの同情の念が消えたわけではない。しかし後の著作からも感じられることだが、ジイドがこの耽美主義者に対しては常にアンビヴァレントな感情を抱いていることも否めまい。ではこの感情は果たしてワイルド自身に向けられたものであろうか。繰り返していうが、二人が会うことはむしろまれであったし、それほど強い接触もなかったのだ。ジイドの作品において、ワイルドの文学的影響は決して顕著には見られない。

とするとこれは内向的ナルシストのジイドが、ワイルドを見るとき常にそこに自分を介在させた結果の感情であるとは考えられないか。日記を破ったのはワイルド個人に対する反撥よりも、彼に惹かれた自分自身への嫌悪によるのかもしれない。ナルシズムが否定的に表れたところの自己嫌悪が、ワイルドを見る目を変えるのである。

ではなぜワイルドに魅せられたのか。ジイドがワイルドに惹かれたのは、その作品によってではない。むしろ語るナルシスたるワイルド、仮面をかぶり、嘘をつき、自分の言葉の効果に酔うダンディの姿こそ、ジイドを魅了させたのではないか。それがジイドのナルシズムには欠けている要素だからである。